

帰国隊員・青年支援プロジェクト報告書

イギリス、レディング大学院における農村開発分野の研究

17年度1次隊 パナマ共和国

村落開発普及員 眞貝沙羅

<目次>

1. はじめに—プロジェクトの背景—
2. プロジェクトの目的
3. プロジェクトの実施内容
4. プロジェクト成果
5. おわりに—謝辞—

添付資料

- ① 修士論文和訳要約
- ② 修士論文
- ③ 成績証明書

1. はじめにープロジェクトの背景ー

プロジェクト申請者は大学卒業後、2005年7月から2007年7月にかけてパナマ共和国において青年海外協力隊の村落開発普及員として同国西部の先住民地域で農村女性を対象にした、現金収入向上や生活改善活動に関わった。パナマの農牧省を配属先とし、農業技術普及に限らず農村社会における生活の総合的な改善の必要性を実感し、農村開発分野の専門性や知識の不足を補うため大学院での研究を志望するに至った。また、協力隊の経験を通し貧困の現場に直面したことから、将来的にも国際協力に携わり続けたいという思いを強くし、当分野でのキャリア・アップに欠かせない修士号取得を希望した。しかし、当初イギリス・ポンドのレートが上昇していたこともあり、経済的な理由から困難となっていた。そこで貴団体から資金のご支援をいただき、2008年9月から2009年の9月までイギリス、レディング大学の大学院に留学した。

2. プロジェクトの目的

- (1) イギリスのレディング大学 (The University of Reading) 農業と国際開発学 (The School of Agriculture, Policy and Development) において、開発と普及法 (MSc Communication for Innovation and Development) の修士号を獲得する。
- (2) 農村開発に関する理論と十分な知識を学び、国際協力業務に必要な語学力、調査手法、ファシリテーションやプレゼンテーション等、実践的なスキルを身につける。
- (3) 青年海外協力隊の経験を基に任地で実施した調査結果をまとめ、より効果的な農村開発プロジェクト実施に向けたアプローチに関する修士論文に取り組む。
- (4) 大学院での研究を通して、国際協力でも特に農村開発の分野での専門性を高め、将来的に国際協力業務において活躍できる人材となれることを目指す。

3. プロジェクトの実施内容

① 2008年7月～9月 (英語コース)

2ヶ月間の事前の英語コースを受け、大学院の授業履修に必要な基礎的英語力を身につけた。コース終了後、英語の試験に合格し、大学院から正式な入学許可を受け取った。この期間にイギリスでの生活に慣れ、大学院での研究に向けて基本的な論文の書き方なども学ぶことが出来た。

② 2008年9月～12月（第一学期）

60単位分の必修科目と選択科目の履修を通して、社会開発を中心とした開発学の理論を全般的に学び、専門の普及法やリサーチ手法等の実践的スキルを身につけた。青年海外協力隊としての現場経験を振り返りつつ、開発理論の文脈の中に位置付けることができた。科目によって、プレゼンテーション、エッセイ提出、学期末には試験を受けた。また、12月には修士論文の仮タイトルが決められた。履修した科目は以下の通りである。

開発における言語と職字

開発学概論

参加型開発

コミュニケーションと開発

コミュニケーションと開発におけるリサーチ法

論文の書き方と調査法

③ 2009年1月～3月（第二学期）

必修及び選択科目を引き続き60単位履修。授業を通して知識を深めると同時に、修士論文の事例として青年海外協力隊として活動したパナマの先住民女性の社会・文化的背景や外部機関との関係性について分析を始めた。また、パナマで入手した資料やインタビュー記録を整理し、不足している資料などを現地から送ってもらった。この頃、担当教官も決定し、修士論文の構成や内容を具体化していった。履修した科目は以下の通りである。

開発途上国の農業政策

ジェンダーと開発

貧困、不公平と生活

開発のためのコミュニケーション・デザイン

④ 2009年4月～9月 第三学期

担当教官と指導のもと、ミーティングを重ねより詳しい修士論文内容や分析方法を絞り込んだ。パナマの農村女性の組織化を中心に、貧困削減に向けた行動・意識変容について焦点を当て、論文執筆を進めた。授業終了後の2009年4月以降、特に集中して修士論文執筆を進め、さらなる文献や関連資料の収集と分析を急いだ。

大学院在学中にも国際協力業務を経験したことから、修士論文をほぼ完成形として終わらせた後、夏休みにあたる7～8月にかけてJICAが実施する大学院生向けのイン

ターンシップ・プログラムを利用して、JICA ベトナム事務所において約1ヵ月半のインターン実習を実施した。協力隊とはまた違う視点で、ハノイの事務所を拠点に最貧困地域である北西部の農村開発関連のプロジェクトを見学したり、ロジスティックな業務を学んだ。また、大分県の一村一品運動をベトナムで広めるためのセミナー企画運営に関わり、総勢240名のベトナムの農業農村開発省の職員を始めとした参加者を集めたセミナーでは、成功を収めることが出来た。最終的にベトナムからのメールを通しての提出となったが、最大制限の1500ワードの修士論文を提出した。その後、論文審査があり、2009年12月12日に卒業し、修士課程を終えることができた。

4. プロジェクト成果

- (1) 大学院で開発学の理論と知識を習得し、農村開発の分野で修士号を獲得した。
- (2) 授業と修士論文の成績との総合評価で、Distinctionという最高成績を収めることが出来た。
- (3) 国際協力業務を執行していくために必須である英語力を向上することができた。
- (4) 青年海外協力隊の経験に基づいた住民主体の農村開発について約1500ワードの修士論文が執筆された（別添参照）。
- (5) 開発分野専門の教授や、同分野の現場で働く世界各国からのクラスメート（政府省庁職員、国際機関職員、国際NGO職員等）の間で学ぶことで、国際感覚を身につけ、幅広い人的ネットワークを築くことができた。
- (6) 大学院終了後、白鷗大学教育学部において特任講師として職を得ることが出来、国際キャリア開発プログラムの実施に関わっている。現在、大学生が青年海外協力隊を含めた国際協力分野に関心を持つことを目指した、各種セミナーやインターンシップの企画運営に携わっている。

5. おわりに—謝辞—

イギリスは学費も全般的に生活費も大変高く、学生にとっては暮らしにくい環境でしたが、貴団体のご支援により充実した留学生活を送ることが出来ました。また、金銭的なサポートがあるということはイギリスの厳しいビザ取得においても、大いに助けになったと思います。大学院では農村開発の専門的知識や英語で論理的かつ客観的にものを考える力を身につけることが出来ました。さらに、グループ・ワークなどを通して様々な文化背景を持った多国籍のクラスメート達と議論し、意見をまとめる力とコミュニケーション能力を鍛え、研究を計画的に進めていくスキルなど知識の習得だけに留まらない貴重な経験を積むことが出来ました。大学院終了後は、希望分野での就職もすることができ、今の職や今後のキャリアの中でもイギリスで見つけた知識とスキル、経験は必

ず生きてくると思います。このような機会を実現して下さった推薦者の JICA の小嶋
上級秘書、そして協力隊を育てる会様には深く、感謝しております。今後とも一協力隊
OG として、現職の任期満了後は国際機関への就職などを通して協力隊の経験を糧に国
際社会に貢献したいと考えています。